



シビルまちづくりステーション 会報 第11号

目次

新年を迎えて	
1. 西日本支部の活動報告	
2. 芝生の恩恵	
3. 自然災害関連の活動報告	
4. 広島地方便利	
5. 私の略歴―「安全・安心まちづくり」を目指して	
6. 最近の切手で見える『日本の橋』	
編集にあたって	

花村 義久	1
森川 勝仁	2
山口 芳夫	4
廣田 治	5
本田 健一	6
伴登 義懿	7
日浦 明	8
池田 昭一	9

平成 28 年 1 月 1 日

2016



新年を迎えて

花村 義久

会員の皆さん、明けましておめでとうございます。
ご家族そろって健やかに良き新年をお迎えのことと存じます。

昨年も世の中ではいろいろなことがありました。一年の漢字は「安」でした。この字には安全で安心な生活を願う市民の気持ちが込められています。

昨年もそれを脅かすことが沢山ありました。異常気象に大洪水、土砂災害、火山噴火、それに不正なマンションのくい打ち、さらに国民全体を不安に陥れた安保問題。

我がNPOにとっても直接、間接関連することも多々あり、安全安心のまちづくりには一層力を入れて行きたいと思うものです。

当NPOで取り組んでいる自然災害対策活動、芝生化等教育・環境改善活動、橋百選・セミナー開催等市民参加のまちづくりの活動、設立して10年余の活動の中から少しずつ対象がはっきりし根をおろしてきました。

また、当NPOで進めていた建設関係のNPO連携推進は、土木学会の百周年記念事業の一部として取り込まれ、ここでは建設の世界の第3勢力を形成する形で動き出そうとしています。この関連で、我々の活動にも新たなテーマが生まれて来る可能性が出てきています。

時代の急速な進歩と状況の変化が起こるなか、当NPOでは活動の実績と新たなメンバーの入会によって幅広い技術力とパワーを保持するようになり、今後さらに活動を発展出来る可能性が生まれて来ています。

これを機会に創立来の運営の体制を見直し、組織を強化して新たな展開をし、将来の道を切り拓いていきたいと考えています。

会員一人ひとりが自分の能力を自分にあった形で活かし、楽しみながら社会貢献を通じて有意義な人生を送って頂くことを切に願うものです。

新年に当たり、今年も良き1年でありますように心よりお祈り申し上げます。



関西地区の今年度の主な活動を紹介します。

《芝生化支援事業》

① ポット苗づくり

神戸市内の貸農園で4月下旬から5月末までの間に、ポット苗約 500 シート(12,500 苗)を作りました。土づくり、土入れ、苗切、植付の工程で一日平均 40 シート程度しか作れないので、土日祝日は朝から夕方陽が沈んだ後も車のヘッドライトの照明で植付を行いました。その後も、最終納品の7月末までの間は毎日水やりが必要ですので、会社への出勤前に農園に寄って散水を行っていましたので、雨の日は嬉しいです。



② 小学校、幼稚園、広場の芝生化支援

2015 年の新設の芝生化としては、大阪市内の小学校 1 校、自治会管理の広場 1 カ所、兵庫県伊丹市内の幼稚園 1 園で、芝生化の計画から移植までの支援をしました。

③ 維持補修作業

サッチ(芝カス)が堆積すると病害などのトラブルの原因となるので、デサッチャー機を購入し、芝生化後 5 年以上経過した施設は必要に応じサッチ除去作業を行っています。

また、スプリンクラーの回転不良や電磁弁の破損など修理作業も年々増加しています。そのお蔭で徐々に修理技術も身についてきました。



《防災活動》

大阪市北区の「防災パートナー事業所」登録を行いました。

大阪市の地域防災リーダーとして、防災訓練時の指導や発災時の救援活動などに協力する事業所として登録され広報誌やHPで紹介されました。12月には大阪市北区の防災訓練で協力しました。右の写真はロープ結束ブースでの指導です。



《教育、委員活動》

校庭緑化に関する普及・教育活動として、伊丹市では新設の幼稚園と既実施園のPTAを対象に園庭緑化方法と維持管理方法の説明を行い、奈良県教育委員会からの依頼では、県内芝生化校の連絡協議会で維持管理方法などの質疑などに対し先生方にアドバイスを行いました。担当の先生は毎年のように変わられるので毎年2回ずつ開催しています。

また、今年度は兵庫県の「県民まちなみ緑化検討委員」になりました。数年前から「花と緑の専門家(芝生)」として校庭の芝生化に関し指導協力していましたので推薦があったようです。内容は兵庫県の補助事業のうち、「緑化駐車場と屋上緑化・壁面緑化」に関する審査業務です。



芝生に関しては、誰しもが、生まれてこの方ごく当たり前に接して来たせいか、何の抵抗も興味も持たなく、ごく当たり前の自然の物として接して来た。私たち終戦直後に生まれた人間は、裸足、草履、下駄、靴の履物を経験し、道路といえば轍の残る農道から砂ぼこりの上がる砂利道を経験し、今の舗装道路と、いわば日本の発展と共に生きてきた。これ等を大袈裟に表現すると、野球にしろ、サッカーにしろ、ちょっとしたスポーツは裸足で対応し、いわば足の裏で感性を磨いた人間と言っても過言ではない。



なかでも、その芝生の恩恵を受けたのは、「栃木県矢板カントリークラブ」でのゴルフのデビューの時である。ご存知のとおり、このゴルフ場はほとんどのコースが打ち下ろしとなっているため、ティーグラウンドに立つと壮大な緑の大地に白い小さなボールが吸い込まれて消えていくような錯覚を覚え、つい力んでしまいミスショットを連発し大叩きの事を思い出しました…。今から30有余年前のゴルフデビューの時のことです。

このことが切っ掛けとなって？今では「小中学校の校庭、幼稚園庭に芝生」をスローガンにボランティア活動を実施しています。27年度に於ける実績は中学校が一校と幼稚園が二園と前年度より若干少ないですが、そ



の理由として耐震工事が入ったためと原因が分っています。また、関東地方での芝生工事はグラウンド全面ではなく学校の玄関先のみであり、悔いが残るものの(幼稚園は全面)、チビリチビリと実績を積んでいます。来年度はパンフレットを基に、市内の小中学校それに幼稚園へ本格的な営業活動を開始し、裸足でグラウンドを駆け回られて、異常気象防止と地球温暖化防止に寄与できるよう頑張りたいものです。

私たちが住む日本は、外国に比べて台風、大雨、洪水、土砂災害、地震、津波、火山噴火などの自然災害が発生しやすい国土です。

日本の国土の面積は全世界のたった 0.28%しかありません。しかし、全世界で起こったマグニチュード6以上の地震の 20.5%が日本で起こり、全世界の活火山の 7.0%が日本にあります。また、全世界の災害で受けた被害金額の 11.9%が日本の被害金額となっています。このように、日本は世界でも災害の割合が高い国です。

1995 年 1 月の阪神・淡路大震災では、死者・行方不明者がそれまで最大の 6437 人となりました。しかし、2011 年(平成 23 年)3 月の東日本大震災では、阪神・淡路大震災の3倍以上の2万人をこえる死者・行方不明者がでました。また、今年(2015年)9月には、台風18号の影響による記録的な豪雨(流域平均時間雨量 20mmが14時間)が続き、茨城県常総市では国管理の1級河川、鬼怒川の堤防が決壊、最大6,900棟の家屋に被害をもたらしました。

当 NPO の本部では自然災害の地震による地盤の液状化と土砂災害について、船橋市民等に知識・普及と広報に努めています。

液状化に関しては、平成23年12月に池畑さんをリーダーに液状化プロジェクトが発足し、平成25年度、26年度には、「船橋市市民公益活動公募型支援事業」に採択され、液状化パンフレットの作成・配布、液状化模擬試験器の製作・実演、地震・防災フォーラム IN 船橋の開催(特別講演:国交省、鎌田高造氏)、防災セミナー開催、液状化対策へのエントランス小冊子作成・配布、小冊子「実態調査から見える被災状況—船橋の液状化被害はこうだった」の発行を行いました。



土砂災害も液状化と同様に「27年度支援事業」に採択され知識普及・広報に努めています。



中学・高校生を対象にした夏休みボランティア体験

広島県の公共事業(平成 26 年 8 月 20 日土砂災害、広島高速 5 号建設計画)と JR 三江線存続について簡単に現状を報告します。

平成 26 年 8 月 20 日土砂災害は、広島市安佐南区、安佐北区等に時間 100mm を超える集中豪雨により 75 名もの犠牲者を出すことになりました。もともと広島県は土砂災害危険箇所が 3 万箇所あり、そのうち 6 千箇所が広島市にあります。現在復旧工事は道路、河川、砂防施設等の調査設計がほぼ終わり工事が進行中です。2020 年までには終了してほしいと思います。時間経過と共に土砂災害の怖さが薄らいできます。今後命の大切さを忘れず避難方法等を常に訓練することが大切だと思います。

広島高速 5 号建設計画は、広島市東区二葉の里 3 丁目(JR 広島駅北側)～温品町の約 4km で、その内 1.8km を二葉山トンネルが占める。この事業は JR 広島駅北口から広島空港(三原市)までの重要なアクセスとして期待されています。この道路は 2000 年に国が事業認可し 2007 年に完成予定でしたが、トンネル上部の住民が掘削時の地盤沈下を理由に、工事差し止めを求めて広島地裁で係争してきました。新聞報道によると、2015 年 11 月有識者によるトンネル技術検討委員会を立ち上げ、住民側の意見を踏まえ工事内容を審議した結果おおむね了解されました。新聞報道によると、公社は近く入札を公告する予定です。この事業は 3 回の延期をしており 2017 年度の完成は遅れる見通しで 4 回目の延期は避けられない状況にあります。

JR 三江線の存続(廃線も視野)について 2015 年 10 月に JR 西日本米子支社より話が合った。三江線は島根県江津市と広島県三次市を結ぶ延長 108.1km の非電化鉄道である。通称江の川鉄道と呼ばれている。歴史は 1926 年に起工し 1975 年に全線開通している。約 50 年にわたる工事を得て完成した鉄道が存続の危機にある。鉄道の利用者は年々減少傾向にあり、三江線の 1 日 1 キロ当たり平均輸送人員は数十人と全国最低となっている。JR 幹線及び都市近郊の鉄道以外、特に山間部は将来同じように存続が検討されると思う。平均輸送人員を見れば沿線自治体は現状把握ができるのではないか。JR から存続提起があつてからでは、廃止しかないように思う。もっと早期に JR と沿線自治体住民は会合を持って鉄道の有効利用について検討すべきである。



「ばんどう よしい」と読みます。石川県河北郡津幡町字倉見の出身です。昭和 15 年(1940 年)3 月、小さな農家の次男として生まれました。倉見地区は四つの集落からなる片田舎で、その一つが「伴登」です。この集落名は住居表示には使われていないこともあって、現在の 1/25,000 地図には表示がありませんが、数十年前の地図には表示されていました。私が調べた範囲では「伴登」姓は、私共の親族以外にはいないと思います。

昭和 37 年建設省に入省しましたが、最初の赴任地は四国徳島で、吉野川直轄改修区域延長計画(池田～岩津間約 40km の追加)等を担当しました。その後高松市にある四国地方建設局河川部を経て、高知では河川・道路両方の調査担当でしたが、昭和 45 年 8 月の台風による異常高潮に遭遇し、住んでいた家が浸水被害に会い、これを契機に直轄高知海岸事業計画を見直しました。NHK 朝の連続ドラマ「おはなはん」の舞台となった愛媛県大洲市に異動となったのは昭和 46 年 4 月で、昭和 42 年の大洪水で被害を受けた「愛媛みかん」畑へのかんがい用水等の供給を主目的とした野村ダム建設のためでした。なお同ダム事業は地元地権者の理解を得て昭和 50 年 3 月に本体工事が発注され、57 年 3 月に竣工と極めて順調に進捗しました。以上のように四国四県すべてを経験した後赴任したのは、これまた新設の「宅地開発公団」で、現在は住宅公団等と合併して都市再生機構(UR 都市機構)となっています。



月山ダム

2 年半の公団勤務の後赴任したのは山形県鶴岡市で、ダム調査事務所でした。(ダムの名称は当時赤川ダムでしたが後に月山ダムに名称変更。)ダム建設基本計画の策定、付替道路計画等を概ね終えて、福島県会津若松市にある阿賀川工事事務所に異動しました。阿賀川工事事務所は阿賀野川の福島県内(阿賀川と名を変え、地元では大川という。)の改修と大川ダムの建設が担当です。このダムの地質はあまり堅固ではないため、河床にダム本体部と減勢工にまたがる幅 80m、延長 220m、厚さ 17m の巨大なマットコンクリートを打設してその上にダム本体を乗せる型式とし、しかも右岸側はロックフィルダムとしました。なおこのマットコンクリート打設で、RCD 工法が開発されました。RCD とは、Roller Compacted Dam-concrete の略で、従来バイブレーターで締め固めていたコンクリートをブルドーザーで敷均し、振動ローラーで締め固める工法で、ノースランプの超固練コンクリートとします。セメント量も少なくなりますのでマスコンクリートの発熱は抑えられ、汎用機械による大量打設が可能ですので、ダム建設では今や主流の工法となっており、後に月山ダムでも採用されました。



大川ダム

生まれ故郷に近い富山に赴任したのは昭和 59 年 4 月でした。この事務所は常願寺川、神通川、庄川、小矢部川の 4 河川及び国道 8 号、41 号、156 号、160 号線の 4 路線の改築・管理を担当する事務所で全国有数の規模の事務所です。この事務所には 4 年 2 ヶ月の在任でした。公務員としての最後は水資源開発公団(現:水資源機構)で霞ヶ浦開発事業を担当しました。その後 50 才で退職し、いわゆるマリコンに十数年勤務しました。

以上縷々述べましたが、優れた上司、同僚、部下に恵まれたことから大過なく勤められたものと感謝しています。また、2,3 年ごとに転勤しながらの勤務でしたが、妻や子供達(2 人姉妹)は常に一緒に転地・転校してくれ、憂いなく過ごせたことを有難く思っています。顧みると水災害対策に関する仕事がほとんどであったと思いますが、今後とも「シビルまちづくりステーション」や「日本防災士会」の皆様と一緒に、「安全・安心まちづくり」を目指して役立ちたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。

6. 最近の切手で見る『日本の橋』

日浦 明

近頃は、郵便局が毎年約 50 種の「記念切手」を発行しており、加えて地方版や企業や団体等の記念としての限定版も多々あり、切手マニアには嬉しい限りである。その中には、風景に欠かせぬ《橋》が多く、誠に嬉しい限りである。最近のものや誰も愛している橋を紹介します。お楽しみ下さい。



・日本の夜景シリーズ 「白鳥大橋」

北海道の工業地帯として多くの工場が昼夜稼働、それと港湾に映える橋はシンボルとなっている。昨年 11 月に発売の「日本の夜景」No.1 最新版です。

・土木学会の 100 周年記念

10 枚の絵柄の中、真中に橋梁が描かれている。土木の中でも「橋建設」は、色々な技術の集大成であり、国土建設や国民生活に大きく寄与している証である。



北九州の「若戸大橋」

開通 50 周年記念に発行された切手である。我が国の長大吊橋の先駆的役割を果たし、本四架橋への礎となった。



←徳島の「かずら橋」

四季折々の眺めが楽しめる奇橋です。

瀬戸大橋

(香川県側全景)

四国の玄関口となっており、車でも鉄道もOKで楽しい旅が出来ます。



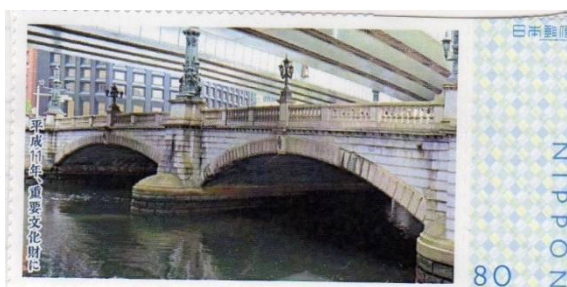
東京・多摩モノレール

各都市で運行のモノレールも橋梁技術の成果です。車窓からの眺めも素晴らしい。



大阪・南港大橋

トラス橋では国内最大規模であり商都大阪のシンボルとなっている。



東京・日本橋

架橋 100 年を超え、国内の道標起点もあり、地名ともなっており、愛されている橋である。

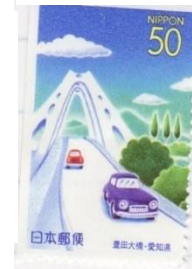


本四・しまなみ海道:大三島橋

本四架橋で初の大型橋梁である。空影は勿論、海上や夫々の島からの眺めでその威容が楽しめる橋である。

愛知県・豊田大橋

自動車の町に相応しい構造の橋であり、近隣には斬新なデザインのサッカー競技場もあり、ドライブや散策に最高のエリアである。



特記: 当 NPO の会員で、仙台在の「佐藤健さん」は、約 30 年前に「切手に見る・世界の橋」と題して内容濃い本を理工図書より刊行している。現在も引続き、関連の活動をされている由、敬服です。

尚、貼付の「切手」は現物をスキャンしましたので、大きさ等に差異があります故、ご留意願います。



編集にあたって

池田昭一

皆様にとって、去年はどのような年だったでしょうか。今年もよろしくお願いいたします。

さて、私は絵葉書を蒐集しています。祖父の代からの絵葉書があり、それを引き継いで増やしたものです。そのなかには、橋の絵葉書も多々あり、楽しみ方もいろいろです。

例えば、過去から現代への橋の移り変わりで、東京都の日本橋をみてみますと、まず江戸時代、「歌川広重、東海道五十三次の浮世絵に描かれた日本橋」（平成 23 年日本美術にみる「橋」ものがたり展）では、橋は木造で、歩いているのは大名行列などの人々です。明治時代、「小林清親、光線画といわれた風景画（明治 14 年）に描かれた日本橋の夜」（平成 10 年 T O K Y O ブリッジ展）では引き続き木造の橋ですが、橋の上には人、馬車、人力車が目に付きます。昭和戦前期の「東京名勝詩（昭和 19 年、白黒）」のなかの日本橋では木造が石造アーチ橋に代わり、橋と女性風俗の写真とともに、“想い宿してオフキース通い、若い娘のビルデング”という洒落た詩が綴られ、情緒があります。近年の「東京」（平成 24 年購入）のなかの日本橋は高速道路に視界を遮られています。並べてみますと、橋自体の変遷と風景の相違が良く分かります。しかし、いずれも銀座の一角として、日本国道路元標としての風格が見受けられます。また、東海道五十三次の西の起点である京都府三条大橋も同様です。昭和戦前期、「京都名所」（白黒）のなかの三条大橋では、橋の写真とともに京ことばを紹介して、“昔は此の橋が東海道五十三次の終点どしたけど、今は京阪電車の終点どす”と戦前らしい風情が窺え、近年の「京都全集」（昭和 50 年購入）のなかの三条大橋と比較しますと、鋼桁橋には変わりはないものの、周りの風景が一変していることが分かります。

また、橋の開通記念絵葉書もあります。長崎県西海橋（昭和 30 年、白黒）、関門海峡に架かる関門橋（昭和 48 年）は、いずれも戦後開通の橋ですが、福島県「伊達郡営鉄橋 大正橋開通記念絵はがき」（白黒）は大正 4 年に開通した時のものです。当時の地元の方々にとっては、橋の開通は悲願であり、一大イベントだったことが分かります。これら西海橋、関門橋、大正橋の絵葉書はいずれも施工中（鋼橋）の写真であり、技術的にも興味あるものだと思います。少なくとも昭和年代までは、絵葉書はこれら橋の開通式以外でも祭礼、展覧会などのセレモニーには欠かせないメディアだったことが分かり、過去と現代の人々の思い、風景と社会の変遷が如実に分かるものとなっています。

土木にとっても、開通式の絵葉書を見ると、地元の人々の喜びが溢れている光景が目に浮かびます。土木は地元にとって本来そのようなものだったでしょう。そのような人々の喜びに結びつくような土木のあり方が、今でも問われている気がします。

発行者

NPO 法人シビルまちづくりステーション

東京都豊島区南池袋 2-12-5 第 3 中野ビル 4F

T E L 03-3987-6646 FAX 03-3989-0062 E メール info@itstation.jp

ホームページ <http://www.itstation.jp>